綜合目録の思想と現代の課題

小倉　親雄

1

我が国において，綜合目録あるいは合同目録などの語をもつて呼ばれている union catalog は，Merritt も述べているように，[1] その本来の意味では，2つあるいはそれ以上の図書館が所蔵する資料を，一本の目録として結合したものに外ならない。従つてこうした形態をもつ目録についての思想は相当古い時代にさかのぼつて存在していたに違いないと考えられている。Berthold はこの目録の理念をもつて，謂わば学者や研究者などが，その必要とする研究資料の所在を，敏速且つ能率的に突きとめようとする必然的な要請によつて自然に生れ出たものであると説明しているが[2]，同時にこうした目録は，これらの人々が，その研究活動を行うに当つて，色々な図書館に所蔵する関係文献を記録して行く，その手始めにおいて，すでに論理的には作られつつあつたものであるとも述べている。このようにして古代において数千にも及ぶ綜合目録が実際には存在したであろうと推察されるのである。

然しながら，現在において我々の辿り得る最も初期の綜合目録——Besterman はそれを「最初の綜合目録」と呼んでいるが[3]——として挙げられるのは，15世紀の始めに生存していた John Boston（1410年頃活躍）の編さんに係る "catologus scriptorum ecclesiae" である。Boston はイングランド所在 Saint Edmund's の修道僧であつたが，すなわち彼は，イギリス国内においてその知り得た修道院ならびに僧庵など195個所以上に亘つて，そこに所蔵されている書物を調査して書名を記録し，個々の書名に対しては，一々その所蔵個所を示す数字を付したのである。この様にして約700名にも及ぶ著者が掲げられた。勿論Boston のこの綜合目録は，必ずしも上記の僧院文庫を調査した結果だけをもつて編さんされた訳ではなく，他の資料を基にして挿入したものも包含されていると伝えられ，彼の目録は，それら文庫の実情そのままを表わしているものということはできないであろうが，こうした彼の企画とその形態は，後世において開始される綜合目録編さん事業の一つの形式を打ち樹てたものであり，特にイギリスという特定の国家を対象としたその企画は，所謂全国綜合目録（national union catalog）という理念の先駆をなすものである。1895年ドイツにおいて「プロシヤ綜合目録 Gesamtkatalog der Preussischen Bibliotheken」という名称で発足し，1936年「ドイツ綜合目録 Deutsche Gesamtkatalog」と改称，全独約100館を協力館として編さんが続けられた大規模な綜合目録，更らに現在に在つては，世界において

最も大きな事績となつている米国議院図書館の綜合目録の如きも，謂わば暗黙の中にBostonの理念を継承したものであるとされている[4]。

この様に Boston において，丁度中世の終り，近世開幕の時に当つて為された綜合目録の企画は，古代にあつて夫々の学者が，自らの研究上必要な資料の手控えとして作製して行つたものとは異つて，ここにおいては僧院という宗教的な限界と，イギリスという国家的な単位に，その理念が展開されているのである。

一つの国家的な範囲を単位とする15世紀のこの様な企画に対して，綜合目録の上に国際的な理念を強調したのは，フランス人 Gabriel Naudé (1600-1653) である。彼は 1642年 Jules Mazarin (1602-61) が首相となると同時に，その蔵書をもつて創設したマザラン文庫 (Bibliothèque Mazarin)—現在はパリ国民図書館の1部となつている—の文庫長となつていた偉大な書誌学者であり，又マザランの前任者 Armand Jean Duplesis Richelieu (1585-1642) の司書を勤めていた人である。1643年10月このマザラン文庫が終に一般に公開される様になつたのも，一に Naudé の卓見に依るものであると云われている[5]。

Naudé は図書館人としての立場から，綜合目録を通じてこそ，始めて学者や研究者に対し，それらの人々が必要とする資料を実際に見出し得る個所を指示できる点を強調した。そのため図書館人は，仮令それが古代のものであろうと近代のものであるとを問わず，或は公的私的の区別なく，更らにはフランス人のものと外国人のものとに関りなく，しかも著名な大図書館の目録に限らず，殆んど人に知られることも，また訪ねられることもなく，永遠の静寂に埋もれんとしているものにまで及んで，すべての目録を写し取つて行く努力を怠つたり，そうした努力を粗略にすることを戒しめたのである[6]。Naudé のこうした言葉は，フランスという国を越えた一種の国際的理念の展開をそこに蔵しているものであり，ベルギーの Brussels において，1895年以来，国際書誌学会(Institute International de Bibliographie) が，その事業の一つとして来た世界綜合目録 (world union catalog) の編さん事業はその理念における系譜を，ここに求めることのできるものである。

こうした国家および国際的な見地に立つ綜合目録の理念に対して，地方的な単位を基盤とする綜合目録の理念も，略々 Naudé の時代と時をひとしくして，イギリスにおいて具体的な姿を見ることができる。最初にこれを唱道した人として挙げられるのは Gerard Langbaine (1608頃—1654) であるが，彼はウエストモーランド (Westmoreland) に生れ，オックスォード大学の Queen's College の学長ならびに大学資料館の管理者となつた人であつた。その企画は，オックスフォードに付随する大小様々な学寮を始めとして，その構内に含まれるものは，仮令それが個人に属するものであつても，そこに所蔵されている一切の図書に対して，一見その総てを知り得る様な完全な目録を作製することにあつたのである。

Berthold はこれをもつて，地域綜合目録（regional union catalog）の最初の企画であると見做しているが，Downs はむしろ，現代的な言葉の厳密な意味から言えば，大学の中央図書館において編成される全学綜合目録（central catalog）に近いものと解釈するのが穏当ではないかという点について，幾分疑問を残すものであると語つている[7]。しかし，この場合においては，大学という一つの機関に必ずしも所属しない多くのものを包含しようとした点で，矢張り一つの地域的単位を基盤としたものとの解釈を為し得るであろう。勿論この Langbaine の計画は結局画餅に帰し，終に実施を見る段階に到達しなかつたが，その構想は幾度か後の人々によつて繰返されるのである。すなわちこれより約 140年後の1794年には，オックスフォード大学当局が，各学寮の文庫に保管されている図書の綜合目録編さんの計画を待つ様になつたのも，同一企画の復活であり，ただこの場合においても結局は円滑な進展を見ず，蔵書中のほんの2，3のリストが作製された程度で中絶を見なければならなかつた。一方19世紀に入り，イギリスでは1826年におけるロンドン大学の創立を始めとして，特に後半期には，多くの大学が設立されると共に，中頃を中心として大学の改革が進められて行つたが，こうした情勢から必然的に大学相互間の調整，中でも図書館の提携に関する問題が新しく登場して来たのである。オックスフォードならびにケンブリッヂ両大学の図書館を，相互にどういう関係に結び付けるかという問題が，改革委員会によつて採り上げられるようになつた事は，この面における最も具体的な形をもつものである。そしてこうした一般的情勢に伴つて再びオックスフォードにおいては，ボドレー図書館（Bodleian Library)を中心とする全学図書館組織の調整問題が論ぜられ，個々に独立して来た各学寮と，夫等図書館相互の利便を図る方策が検討されたのである。すなわちボドレー図書館に所蔵しないもので，各学寮においては必ずしも必要としない様な図書をここに移す提案などは，その一つの例であり，同時にこの問題に関連して綜合目録編さんの提案がここでも再び繰返されるのである[8]。オックスフオード大学において見られたこうした経緯は，結局 Langbaine の構想に発しながら，次第に各学寮を直接の対象とする方向を目指している点では，Downs のいう現在の大学に見られる全学綜合目録の性格に，漸次近付いて行つたと見るべきであろう。しかしイギリスにおいては，19世紀の後半に入ると，綜合目録の理念には，はるかに大きな発展が見られるのである。すなわち全イギリス綜合目録を作るべきであるという意見の抬頭であり，当然大英博物館がその衝に当るべき使命を有する訳であつたが，当時この図書館には，その緊急な課題として，蔵書目録印刷の事業があり，結局この印刷目録の完成という問題の前に，イギリス綜合目録編さんの提案は葬り去られるのである。然しながら大英博物館運営の方針を決定する王国委員会（Royal Commission）においては，この全英綜合目録編さんの提案はしばしば繰り返され，その企画開始は，同館蔵書目録印刷の問題と同様に特に

緊急を要することが提唱された。その積極的な主唱者としては Charles W. Dilkes の名が，一方この様な企画はユートピア・プラン（Utopian plan）であるとなして，終にこれを葬つた人としてはRichard Garnett の名が挙げられる[9]。Dilkes が1850年に提案した具体的内容は，1600年迄に印刷されたすべての図書に対する綜合目録を編さんすることであつたが，彼は1877年に至つて，更らにその後の200年を加え，1800年現在とする意見を提出したのである。一方 Garnett は，当時大英博物館閲覧室管理識（Superintendent）に在つた人であり，従つて同館蔵書目録の印刷について直接利害関係を有する立場に在つた。すなわち大英博物館当事者は，当時同館の印本部長（Keeper of Printed Books）であつた Antonio Panizzi（1797-1879）の意見，すなわち蔵書目録の印刷は，全原稿の完了を俟つて始めて開始すべきであるという主張を却けて，1841年Aの部刊行を強行し，Panizzi はこれに対し，自己の責任において，それに続く刊行を独断的に中止してしまつたのである。Garnett はこの様な印刷目録の問題を中心とする大英博物館紛争の中に在つて，特にその職務上の立場から，むしろ蔵書目録印刷の急務を力説した人であつて，綜合目録の思想と企画そのものに対して消極的な立場をとつた訳ではなかつた。のみならず彼自身，大英博物館の目録をもつて "universal catalogue" の土台として行くべきであるという考え方さえ抱いていた。この意味では，やがてアメリカにおいて開始を見た議院図書館の全米綜合目録が歩んだ方向を示唆しているということかできよう。

19世紀の中葉，イギリスにおいて為されたこの様な綜合目録に対する提唱，特に Dilkes の提案は終に廃案に帰したが，その思想は，同時にロンドン文芸協会（London Society of Arts）が，1878年には国際的な参加の下に，イギリス文学に関する世界綜合目録を作製しようとした企画に及んでいる[10]。いずれにしてもこの国における上述の如き綜合目録の企画挫折は，自然17世紀に打ち樹てられた Langbaine による地域綜合目録の理念を，一つの強い伝統として残す結果となつた。現にこの国がロンドンの国立中央図書館（National Central Library）を中核として行つている全英綜合目録の編成は，この伝統の上に立つ組織であり，地域綜合目録の完成を前提とする特長的な性格の上に立つている。

フランスにおいては，17世紀の前半において，Naudé に依つて為された国際的なこの目録に対する思想が見られたが，1789年フランス革命の勃発に伴つて，綜合目録の思想が抬頭して来た。すなわち新議会による封建的特権の廃止により，11月にはフランスの教会文庫は，その財産と共に政府の没収するところとなつたが，3年後の1792年には，革命の激化と共に，難を避けて海外に出奔して行つた所謂亡命貴族（émigrés）の個人文庫が没収された。この個人の所有から離れた図書の数は約800万冊，パリのものだけでも凡そ200万冊と概算されている。こうした事情のもとでフランス大綜合目録作製計画が為されたのは，没収によつて得

た多量の図書に対する保全・分類，更らに之を一般の利用に供する問題に関連してであつた[11]。

一方アメリカにおける全米綜合目録の思想は，19世紀の中葉，スミソニアン協会図書館を中心とし，恰もイギリスと期をひとしくして抬頭している。当時この協会図書館の館長は，ボストン公共図書館（Boston Public Library）の初代館長であり，アメリカ図書館界の創建者とまで言われている Charles Coffin Jewett であつたが，彼の計画に基づいて，この協会図書館は，1851年アメリカにおいて刊行される全図書に対する納本寄托の権利を獲得し，中央綜合目録の編成，全米綜合書誌の刊行を行わんとしたのである。1854年こうした計画は，米国議会に依り否決され実現を見なかつたが，Jewett の綜合目録編成の構想は，ステロ版（sterotyped plates）を用いて行う方法であつて[12]，すなわち各図書の書名を別々にこの鉛版で印刷し，更らにこのステロ整版を，そのままアルファベット順に排列して保存し，追加されて来る新しい図書の版を，容易に繰込み得る様にし，こうした方法でもつて，その最後の目的であるアメリカにおける図書館の全体目録を形成して行こうとしたものであつた。特に彼がその綜合目録の構想に関連し，この様な目録編成の先決条件として，統一目録規則制定の必要に想到し，大英博物館の Panizzi が，1839年他の4人の人々と共に，いわゆる五人委員会を組織して，その図書館用として作成したパニッチの規則91個条に則つて，アメリカにおける最初の目録規則を作製し，爾後における英米目録規則の基礎を築いたことは，他面彼が当時の慣習的な目録であつた著者及件名の二つを結合する方法を提唱して，アメリカにおける辞書体目録（dictionary catalog）の基盤をを設定したことと共に，目録の歴史の上に偉大な足跡を留めるものである[13]。

上述の如く，綜合目録の思想は，15世紀から17世紀の間において，すでに地域的なものから，国家的更らには国際的なものにまで及んで，明確な企画をもつ様になつたが，言うまでもなく，この綜合目録の理念の根抵にある基本的なものは，或る特定資料の所在を突き止める事を容易にするその機能に基ずいているのである。Pafford が，綜合目録作製の主目的を "finding-list purpose" という言葉をもつて説明しているのは[14]，この事を指しており，資料所在個所に対する誘導，すなわち図書の directory としての機能がこうした理念の発生を促したと見ることができる。同時に初期におけるこの目録編成の構想は，いずれもこの目的の上に為されたものということができよう。然しこうした機能は，謂わばこの目録がもつ一つの側面であつて，現代においては図書館相互間に行われる資料の貸借，特に貸出しの負担を普遍的に配分する機能を始めとして，数個の図書館が，稀にしか利用されることのないしかも高価な資料を購入する必要をなくすること，或る種の図書館資料については，その重複数を削減し得ること，蔵書構成上に見られる欠陥の指摘，特に一つの地域に見

られるその実情を明らかにすると共に，補充されなければならない部門の示唆，更らには共同購入の問題さえも，この綜合目録の機能に期待するのである。こうした一般的に挙げられている綜合目録の有つ機能と共に，図書館業務の上に最も大きな比率を占めて来た目録作業の実際にもたらす絶大な改善を数えることができるであろう。特に19世紀の終りから今世紀の始めに亘つて，多くの図書館人や学者が，この綜合目録を中心とする課題に対して，異常な努力を傾けるようになつたのは，この目録のもつ機能が至つて広範な内容をもつものであると共に，またその理念が綜合書誌（universal bibliography）の思想と相俟つて，結局はあらゆる国，あらゆる時代におけるすべての文献を記録し，しかも実際にこれに人々を触れしめることを可能にする一つの道を拓くものとして，書誌の編さんにたずさわつて来た人々，ならびに図書館人の双方が共にが抱いてきた特殊な書誌的情熱に連るものがあるためである。こうした夢—Downs はこれを "Bibliographical utopia" という言葉をもつて表現しているが[15]—は勿論，過去においてはいずれも部分的な成功のみをもつて挫折せざるを得なかつたものである。それにも拘らず，こうしたものに対する情熱は，依然として現在においても持続され，しかも不断に高揚されて来ているのである。

Downs も述べているように，この綜合目録は，図書館相互の協力体制がもたらす最も壮観な形態の一つである。この存在によつて，図書館が過去において当面して来た至難な諸問題に解決を与えて呉れる事の明らかなものである。世界の多くの国々において，特に今世紀に及んで，この大きな事業が，飛躍的な発展を見るようになつたのも，一にこうした事情に基ずくところによるものである。"library millennium" が，この綜合目録の健全な発達によつて招来し得ると考える人は勿論殆んど存しないとしても，Downs はそれにも拘らず，そうした構想の可能性は非常に大きなものであると語つている[16]。然しながらそこにはこの目録の有つ大きな威力と共に，同時にその限界が，客観的に把握されることを必要とするのである。ここに綜合目録の理念が過去において辿つて来た歩みを，現代の有つ特殊な事情との関連において考察されなければならない理由が存する。

1) Merritt, LeRoy C. : The administrative, fiscal, and quantitative aspects of the regional union catalog. *In* Downs, Robert B. *ed.* Union catalogs in the United States. 1942. p. 5.

2) Berthold, Arthur B. : The union catalog idea. *In* Randal, William M. *ed.* The acquisition and cataloging of books. 3rd impression. 1949. p. 239.

3) Besterman Theodore : The beginnings of systematic bibliography. 1935. p. 19.

4, 6) Berthold, Arthur B. : *ibid.*, p. 240.

5) Hoesen, Henry Bartlett van : Bibliography ; practical, enumerative, historical. 1928. p. 414.

7) Downs, Robert B. Union catalogs in the United States. 1942. p. 5.

8) Predeek, Albert : A history of libraries in Great Britain and North America, *tr*. by Laurence S. Thompson. 1947. p. 43.

9, 10) *ibid.*, p. 69-70.

11) Hessel Alfred : Geschichte der Bibliotheken. 1925. p. 95.

12) Berthold, Arthur B. : *ibid.*, p. 241.

13) Predeek, Albert : *ibid.*, p. 18.

14) Wilson. Lousi Round & Tauber, Maurice F. : The university library, 2nd impression. 1948. p. 418.

15, 16) Downs, Robert B. : *ibid.*, introduction.

2

綜合目録の理念は，当然その目指す方向の密接な関係から，綜合書誌の理想と相関連して想起される。共に "bibliographical utopia" の思想に連るものとして，綜合目録に対して為されたと同様の書誌的情熱を歴史的に辿り得るものであると共に，かつては両者の間に，截然とした区別を設けることのできない時代が存在した。

Van Hoesen は，この綜合書誌（universal bibliography）を定義して，編さん者が，その手を置くことのできるあらゆる図書を列挙した書誌と述べているが[1]，この言葉の意味は必ずしも明確ではない。ただ綜合書誌の綜合目録に対する根本的な相違は，後者が現実に所蔵されているものに対する目録であるのに反して，前者の場合においては，既存・現存を問わないのみならず，同時にこれに掲げられている文献は，必ずしも，図書館・文庫・集書などに収蔵されているものに限らない点に存するということができよう。従つて綜合目録においては，これを通じて現実にそこに掲げられている書物を手にすることの可能性を示しているのに対して，綜合書誌にあつては，そのすべてに対しては，それを期待することの不可能を前提としているものである。こうした綜合書誌の普遍的な包括性が，その発展の歴史的過程を，綜合目録とは逆の方法にもたらした原因の一つと考えられるのである。すなわちこの綜合書誌は，その理想を追う書誌の形態としては，むしろ最も古いものであるとされるのはこの意味であつて，刊本の多量化と図書売買の盛行，更らには学問の分化や，図書集収の専門化に伴つて，綜合書誌はその形態を選択書誌，国別書誌，更らには主題別書誌などの分化現象を現わすと共に，それらを更らに再結合して行く活動として，書誌の書誌，書誌の書誌の書誌，という一つの方向を辿るのである。

Besterman は，若し，綜合書誌の創始ということが，賞讃さるべき事実として考え得られるならば，Conrad Gesner こそは，それから由来するあらゆる栄誉の称号を与えらるべき人であると述べている[2]この様にして彼は Gesnerを「最初の綜合書誌編さん者The first

universal bibliographer」と呼んだのであるが，これはいうまでもなく，1545年に編さんされた“Bibliotheca Universalis”という偉大な業績に基づくものである。

Gesner (Conrado Gesnero, 1516-1565) は瑞西のチューリッヒ生れの元来は植物学者であつたが，動物学の面においても「科学的動物学の樹立者」[3]，「近代動物学の父」[4] などとも呼ばれており，エンサィクロペヂストとしては「第二のプリニィ Second Pliny」の名が与えられている。プリニィ (Pliny the Elder ; Gaius Plinius Secundus, 23-79) はイタリーの北部ロンバルド州のコモ (Como) 生れの博物学者として著名であり，ローマ皇帝ヴェスパシアヌス (Vespanianus, 70-70 在位) の下で，数々の要職についたが，偶々ヴェスビァス火山の爆発に際して死亡した。しかしその学問的業績として，彼の「博物学 Historia Naturalis」37巻の大著は，その名を不朽ならしめているものであるが，この書は宇宙の現象に関する記述，地名辞典，人類学，動物学，植物学，医学，鉱物学，絵画，彫刻など，広汎な内容を取扱つた一種の百科事典であり，同時に古代ローマの文化，学問，技術などに関する知識の宝庫と称せられているものである。Gesner を Pliny に比肩する理由は，すなわち共に元来は自然科学者でありながら，結局はエンサィクロペヂストとしての多くの業績を留めていることによるものであつて，Gesner が遺している文法学，博物学，医学，哲学に関する主要な著述だけでも，実に72種に及ぶと称せられている[5]。然しながら彼の名を一層不朽ならしめているのは，Bibliographer としての多方面に亘る偉大な足跡であり，この点において Pliny とは異なる側面がある。Besterman は，Gesner の本務とするこの自然科学者としての数多い偉大な業績に加えて，相次いで驚異的な書誌的事業を完成して行つた彼の存在を充分な理由として，16世紀に在つても，たしかに「巨人 giants」というものが実在していたと絶叫することができるとまで語つている程である[6]。また彼はこの面においても単に綜合書誌の開基，多数の秀れた書誌の編さん者であるのみならず，その目録方式 (cataloguing methods) の独創性において，目録法の歴史の上にも不滅の功績を留め，一方又イギリス図書館の父といわれるエドワァーズ (Edward Edwards) によつて，最初の書誌的分類表 (first bibliographical scheme) の創案者とされて，分類法の歴史の上にも，その地位を特筆されているが[7]，更らに彼が，ドイツ系のスイス人であつたため，ドイツの図書館学者は，彼をもつて書誌及び目録に対して解題 (Annotation) を付して行くドイツのすぐれた伝統を切り開いた人として，その名をたたえている[8]。

その「綜合書誌 Bibliotheca Universalis」は，彼が直接又は間接に知ることのできたラテン，ギリシヤならびにヘブライ語，すなわち当時における学問語で書かれた文献を挙げ，之に解題を付したフォリオ版の1300頁にも及ぶもので，収録した文献の数は12,000余種，その排列は著者洗礼名のアルファベット順という中世的な方法に拠り，更らにそれとは逆に，姓

のアルファベット順に依る著者名リストを付したものである。これがすなわちこの綜合書誌の第1部に該当する分であつて，これに対する資料集収を開始したのが，25才頃の時であつたといわれている[9]。次いで1548年から49年に亘つて，収載文献に対する増補が行われ，有名な21項目に分類排列されるのである。然しながら実際には，ここで完成しているのは，19の部門のみであつて，第20番目の部門すなわち神学の部は，1849年に至つて別個に刊行され，第21番目に当る医学の部は未だ刊行を見るに至つていない。これが綜合書誌の第2部をなすものである。第3部は，第2部におけるアルファベット順件名目録となるべきものであつたが，結局ゲスナーは，第2部に対する件名索引でもつて満足するという結果に終つたのである。上述の目録方式における独創性というのは，この様に文献に近付く方法として為された新なる創意，すなわち著者，分類，件名の3つをもつてする理念，更らには著者についても，洗礼名による中世的な方法を一応踏襲しながら，別個に現代と同一の方法である姓との双方からする考慮がここに加えられている事などである。而してこうした方法こそは，我々現代の図書館人達が，自らの時代において再発見しなければならなかつたものであつて，Gesner は数百年の昔においてすでにその思想に到達していたのである。

いずれにせよこの綜合書誌は，その名称の示す通り，編者がここに企図したものはその universality ということにあつた。そしてその普遍性がどの程度に迄達成されているかということについての反省が，この種事業のその後における企画に当つて常に加えられるのである。すでに敍述した Brussels 市の国際書誌学会の目指すところは，言うまでもなく Gesner のその企画を最も大きな規模において成し遂げんとする事業であるが，1927年"The Library Journal" 誌上に掲げられた Ernest Cushing Richardson の一文 "The Brussels Institute again!" は，よくこの間の事情を説明している。すなわちすでにこの学会において編成を終つていた1300万枚の目録カードを前にして，この種事業を空中楼閣に等しく，無用の計画と非難する一派と，中途におけるこの種事業の放棄は正に「書誌的悲劇 bibliographical tragedy」を意味するものであるとして，これを擁護する人々との間に斗わされた激しい論争の姿を留めている。而してここにおいても，Gesner の綜合書誌における一つの限度が採り上げられているのである。

Van Hoesen は，Gesner の綜合書誌における Universalis の語は，勿論便宜的な意味に止まるものであつて，その実は結局広範囲の部分書誌 (extensive "partial"), あるいは准綜合書誌 (quasi-universal bibliography) とならざるを得なかつたと述べ[10]，これが自国の文献さえも除外して，ラテン，ギリシャ，ヘブライという当時の学問語に限定している点を挙げ，さらに刊本としては勢々4万から5万種程度と考えられる当時に在つてさえも，なお Gesnerの綜合書誌が事実は部分的なもの，しかも不完全なものであつたとするならば，我

々は今やたしかに universality ということは断念すべきであろう[11] と語つているのは，時代の下ると共に，加速度的に加つて来た人間記録の増大が，かかる企画の可能性に対する希望を益々薄くせざるを得ない関係を伝えているものである。事実 Besterman ものべている様に，書誌を作るということの起源は，至つて古い時代に遡つて考え得られるであろう。そしてこうしたものを作ることの必要は，言うまでもなく書物の数が多くなつて来たことによるものであり，印刷術の発明に先立つ遙か以前でも，余りにも書物の数が多すぎることを訴える人の声さえも聞かれた。従つて紀元前において，すでに多かれ少なかれ，正式の書誌が存在し，紀元第2世紀頃でも，古代ギリシヤの医師ならびに哲学者 Claudius Galen (Klaudios Galenos, 131-201) の如きは，特に彼が多作家であつた関係もあつて，自身でその著作に対する分類書誌を編さんして置く必要を痛感したほどである。すなわち Galen は，先ず彼の著述約500種を，註釈，解剖学，ヒポクラテス関係，道徳哲学，文法及修辞学など17の部門に分類して，書誌を作製し，引続いて之を増補することさえも行つている程である。すなわちこの時代にあつても，すでに自著に対する書誌すなわち auto-bibliography が必要とされる程度に，書物の作製が数多く行われる様になつていたのである。

15世紀における印刷術の発明と，それによつてもたらされた急激な図書の増加とは，その跡を書誌に依つて辿つて行くことの困難をいよいよ増大して行つた。むしろそうしたことの到底不可能な時代が訪れると共に，次いで17世紀中には，更らに個々の書物は言うまでもなく，書物を列記したリストを追跡して行くことさえも困難を感ずる事態に立入るのである。Gesner の時代は丁度印刷術の発明から1世紀を経た16世紀の前半であつて，彼が図書の総攬を企図したその綜合書誌を1548—9年に，次いでこの書誌では著者名に依つて分類されていた書名を，文法及言語学，弁論法，修辞学など21項目に再編成し，これに "Pandectae sive partitionum universalium" と命名したが，この "Pandectae" が，Archer Taylor に依つて，「最初の近代的書誌の書誌」[12] であるとされているのである。この Taylor の説は，最初の書誌の書誌を，Antoine Teisser (1632-1715) が1686年スイスの Geneva で刊行した "Catalogus" であるとしている Besterman の見解と相違し[13]，時代的にも約120年遡るが，Taylor は更らに「近代的書誌の書誌は，一般件名索引中の部分として始る」と述べている[14]。すなわち "Pandectae" の件名索引については，すでに叙述した通りであるが，その件名索引の一部として，Gesner に依つて書誌の書誌が掲げられていることを挙げているのである。ここに Gesner の置かれていた時代をはつきりと理解することができる。すなわち彼はすでに，文献に近付く方法として，総攬的な書誌と，書誌の書誌という2つの書誌形態をもつてしているのである。

Gesner の綜合書誌の内容を為している資料が，どう言う方法をもつて収集されたかにつ

いては，その副標題の示す通り，先ず図書館所蔵のものが挙げられるであろうが，その他のものとしては，印刷業者の目録，友人の書簡から得たもの，学者の教示に基ずくもの，更らには著述家の目録中から摘録したものなどのあつたことが記されている。一方又古代における著者のものに関する記載は，例えば紀元2—3世紀に亘る間生存していたギリシヤの修辞学者アテナイオス（Athenaios, Athendeus）の手になる「学者達の饗宴 Deipnosophists」すなわち700人余に及ぶ詩人，劇作家，歴史家などの作品中から引用して作つた一大集成や，あるいは又10世紀の頃に活躍したと想像されているギリシヤの文法学者で辞典編修者でもあつたスィダス（Suidas）のギリシヤ辞典（Lexicon）からの抜き書など，要するに間接的な資料に基づいて為されており，従つてその中には勿論一部分あるいはその全部さえも消失して終つていたものもあつたと言われる[15]。彼の綜合書誌が，その実においては結局部分書誌乃至は准綜合書誌であるといわれる所以は，こうした資料の上における制約と，これに掲げられた文献が，当時における学問語に限定されたという二つの大きな事情に拠るものであるが，逆にこうした特に後者の制約をもつて臨んだ事が，この事業を一応の成功に至らしめた所以でもあつて，実は彼こそは又同時に書誌の universality を成し遂げようとする努力が，兎に角相当程度成功を見た最後の人であつたとも言えるのである。彼が1555年その補遺（Appendix Bibliothecae）として公にした際に収録した3,000種の図書をも含めて，合計15,000種の文献も，インキュナビラだけで約40,000が今日に伝えられていることから推定して，恐らくは当時存在していたラテン，ギリシヤ，ヘブライ文献の総数に対しては，せいぜい四分の一乃至五分の一程度に過ぎないであろうとさえ言われている[16]。

1) Hoesen, Henry Bartlett van : Bibligraphy ; practical, enumerative, historical, 1928. p. 239.

2) Besterman, Theodore : The beginning of systematic bibliography. 1935. p. 14.

3) Der neue Herder.

4) Honmerton, J. A., *ed.* Concise universal bibliography.

5) Sayers, Berwick : Introduction to library classification, 8th *ed.* 1950. p. 80.

6, 7) *ibid.*, p. 18.

8) Reichhardt, Grünther : Die Bedeutung der Annotation für Bibliographie und Katalog, *in* Bibliothek, Bibliothekar, Bibliothekswissenschaft ; Festschrift Joris Vorstius zum 60. Geburgstag dargebracht. p. 88.

9) Thornton, John L. : The chronology of librarianship. 1941. p. 45.

10) Hoesen, Henry Bartlett van : *ibid.*, p. 239.

11) *ibid.*, p. 241.

12) Taylor, Archer : A history of bibliographies of bibliographies. 1955. p. 131.

13) Besterman Theodore : A world bibliography of bibliographies, 3rd ed. 1955. Introduction.

14) Taylor, Archer : *ibid.*, p. 4.
15) Hoesen, Henry Bartlett van : *ibid.*, p. 240.
16) Besterman Theodore : The beginnings of systematic bibliography. 1935. p. 19-20.

3

一つの書誌において universality を目指すことの困難性と限界が，Gesner の綜合書誌において具体的に示されたが，一方彼が「書誌の書誌」という書誌形態をもつて，間接的に文献の足跡を辿る新しい形態を生み出したことは，爾後における書誌事業の上に，一つの明確な系譜をつくることになつた。すなわち Theodore Besterman (1904-) の「世界の書誌の書誌 A world bibliography of bibliographies」に至る一連の事業である。すなわち Gesner から約一世紀の後，始めてこの書誌の書誌が，それ自身独立した形で刊行される段階に到達するのであつて，その最初のものとして，1643年 Joducus a Dudinck の編さんに成る "Bibliothecariographia" が現われ，これをもつて書誌の書誌は先ず丁年に達したと見做されている[1]。この書物はすでに17世紀，ルーテル派の神学者 Caspar Sagittarius (1643-1694) 以来，過去3世紀に亘つて多くの人々によつて探索されて来たにも拘らず，実は未だ発見されるに至らないものであつて，恐らくは亡失に帰したか，あるいはむしろ一度として終に刊行の機を有たなかつたものであろうかとも想像されている[2]。すなわちなお "Bibliographical ghost" に属すものではあるが，然しその伝えられている書名，特にその「書誌，目録，索引，リスト，図書室その他の標題の下にあらわれたすべての著者および著述のリスト」という副書名によつて，Dudinck が，書誌の書誌に対して抱いていた構想をはつきりと窺うことのできるものである。

この様に17世紀の前半，書誌の書誌は，それ以前における謂わば付属的な地位から，ここに一個の独立したものとしての発展を遂げるのである。そして現代におけるその帰結とも言うべき大事業が，すなわち Besterman による「世界の書誌の書誌」であるとすることができよう。この書誌は，その初版を1939年から40年に亘つて，また第2版を1947年刊行したが，1955年2月に始つて，目下続刊中の第3版（1853年—54現在），すなわち最後版は，4冊をもつて構成され，これに収録される書誌の数はおよそ9万種（初版の約2倍，2版に対しては約25,000種の増加），40個国の国語が包含され，12,000に及ぶ綱目ならびに小綱目に分類編さんされるものである。既刊の第1冊（A—E）が663頁，第2冊（F—N）は766頁に及ぶ大冊であつて，けだし個人の力をもつてなされた書誌的事業としては最大のものということができるであろうし，現代がもつ書誌の書誌の総決算とまで評せられているものである。しかもフィンランド，ハンガリィ，更らにはスラブ系諸国のものも，過去において為

されたこの種書誌よりは，はるかに多くのものを集録するために異常な努力が払らわれているが，ただ終に東洋語による書誌を包含するまでには至らなかつた。この点について彼自身遺憾の意を表して，若し将来こうした書誌が引続いて編さんされて行くとすれば，たしかにそれは，あらゆる主題，あらゆる時代，そしてあらゆる言語を包括したものになるべきであろうと語つている。

Besterman のこの書が，全く彼自身の個人的な精査の結果に基づいて為されたという事実は，真に驚嘆に値するものである。実に20年の歳月がこれに捧げられ，大英博物館，イギリス国内52個所の図書館とその類縁機関，スイスのベルン国立図書館とその編成に係る綜合目録など，ヨーロッパのものについで，ユネスコの旅費援助に基ずく米国議院図書館の書誌文献の直接調査も行われている。この米国に赴いての調査に依つて，アメリカ大陸諸国の書誌，今次大戦のヨーロッパ交戦中ならびに戦後における出版物や資料が入手し得られたことに対し，ユネスコ及び議院図書館に対し，深い感謝の意が表明されているが，この様に彼が収録した資料はその殆んどが，直接自身調査の結果得たものであつて，間接的に得られたものは，信拠し得る図書館の蔵書目録のみに限られ，而も後者の比率は僅か1％にも足らないものであつたことを付記している[4]。しかもこの間接資料に基づいて収録したものは，各書誌の最後に付されている角括弧とその中の数字の2つが欠如していることによつて，容易に判別し得るよう考慮が加えられているのである。

Besterman は今やこの書誌の引続く改訂増補の必要を痛感しながら，この事業に対しては，第3版を最後版 (third and final edition) と銘うつことによつて自ら終止符を打ち，第3版が刊行されたスイスのジュネーブにここ4年来居住して，新しい業務に就任している。すなわちこの地のヴォルテール記念博物館の館長として，その書簡集の決定版作製の仕事に携つているのである[5]。ジュネーブの郊外にあるムリオ (Mourion) は，すなわちヴォルテールが，その晩年をここにすごした地であつた。このように彼がその20年来の事業からいよいよ身を退くに至つた理由として，この企画が最早や，個人の能力と資力の限界を越えるものとなつた旨を記している。ここに正に書誌の書誌が現在において終に到達するに至つた限度を考えることができるであろう。Taylor 教授が20世紀における書誌の書誌作製の特長的な面は，共働であると述べている言葉は[6]，けだし Besterman の述懐しているところと表裏の関係に在るものであり，Gesner によつて開かれたこの書誌形態を第一の段階と見做す人々によつて，Besterman の「世界の書誌の書誌」は，その歴史的発展の上から第二の段階と解されているが，それは上述の現代におけるこの書誌形態の一つの限度を意味していると共に，更らには，そうした結果として現われるべき第三の形態，すなわち「書誌の書誌の書誌」がすでに現われて来る段階に到達していることを意味するものである。

John Crearer Library の Aksel G. S. Josephson が，1901年先ず156種の「書誌の書誌」を年代順に整理排列して，この種の書誌形態を具体化するに至つたのは，こうした意味において特筆されねばならないものである[7]。

1) Taylor, Archer : A history of bibliographies of bibliographies. 1955. p. 131.
2) *ibid.*, p. 22.
3) Besterman Theodore : A world bibliography of bibliographies, 3rd ed. 1955. Preface.
4) *ibid.*, introduction.
5) 拙稿：「世界の書誌の書誌とシャドー・ベスターマン」（学鐙，1956年5月号）
6) Taylor, Archer : *ibid.*, p. 64.
7) *ibid.*, p. 129, 140 ; Besterman : A world bibliography of bibliographies. Introduction.

4

Gesner の綜合書誌は，文献選択に際し，言語上の制限をもつて臨んだことによつて，或る程度の綜合性を達成した，謂わば歴史上唯一のものとなつたが，これに掲げられている資料の典拠は，上述の如く何ら特定の原則をもつてしたものではなかつた。従つて地域的・国家的な制約もなく，既存・現存・亡失を問わず，また図書館についても，蔵書目録からの抄録更らにはあちこちの図書館自体から直接得たものなどを包含しているが，これについても，ドイツおよびイタリーにおける公共・私設の図書館がその対象となつた。こうした事情はすなわち，この綜合書誌が，同時に綜合目録としての性格を備えているということができる。綜合目録の歴史の上に，常に Gesner の足跡が想起されるのは，両者の理念が，窮極において同一の目標に連なるため許りでなく，具体的にはこうした理由にもよるものである。勿論綜合目録の国際的な理念を強く唱えた人として，17世紀初頭の Gabriel Natudé の位置は高く評価さるべきであろうが，彼の主唱も，部分的には，すでに1世紀以前に遡る Gesner の綜合書誌の中に，その具体的な実現を見ているのである。このように綜合目録が，綜合書誌に従属する形で，その名称の下に包含されていたのが初期の形態であつた。爾後書誌の方は，その綜合性の理念を失わない別の書誌形態，すなわち Josephson の「書誌の書誌の書誌」に至る一連の道程を辿り，一方その中の目録は，国際的綜合性を却つて最後の目標として，或る地域，主題，形態（特に逐次刊行物）など可能な一つの単位と形態とを求めて発達し，現代の段階に到達するに至つた。

然しながら真の書誌活動は，これら両者を切り離したものの上に成立つ訳ではなく，夫等を一体とした機能に期待するものであることは言うまでもない。ここに近年強く唱えられるようになつた書誌センター（bibliographical center）の構想が，或る意味では Gesner に

見られた思想，および書誌と目録との二つが一体に取扱われた初期形態の復活であるとも解することができよう。勿論この書誌センターは，未だ歴史も浅く，従つてアメリカにおいてさえ，その企図しているものを述べ得るだけで，このセンターの概念を説明するに充分な経験は未だ経ていないとされている程である[2]。然し綜合目録それ自体よりは，もつと広範囲で，包括的な書誌活動を企図し，この名称の下に綜合目録を従属させ，歴史的な発展の段階から言えば，特に地域綜合目録に対しては，その活動ならびに資料を集中化するための，当然の論理的段階を意味するものである[3]。すなわち従来の綜合目録は，この段階においては，書誌センターを構成する一部分となつて来た。1935年コロラド州のデンバー公共図書館で取敢えず発足し，翌年設立を見た"Bibliographical Center for Research"は，全くこの形をとるものであり，1942年において約300万枚の図書館の目録カードから成る綜合目録の外に，主要な国別書誌（national bibliography），販売書誌（trade bibliography），件名書誌（subject bibliography）約8000冊を始め，書誌に関するカード目録，更らにコロラド州出身者による著書，コロラド州に就いて書かれた書物，コロラド州において出版された学術論文など，いわゆる"location bibliography"の類をここに集収して，この地域における図書館の全共同事業の中心機関として活動している[4]。1940年ワシントン大学図書館内に発足したアィダホ，モンターナ，オレゴン，ワシントン，ブリティシュ・コロンビア（カナダ）の5州をその範囲とする北西部書誌センター（Pacific Northwest Bibliographical Center）も，地区内27の図書館に対する綜合目録の編成と共に，あらゆる書誌・目録などに関する資料類を包括することをその基本的な計画としており[5]，フィラデルフィアの綜合目録が，同じく1940年に，新しく組織された書誌センター（Philadelphia Bibliographical Center and Union Catalogue）の一部に包含されて行つた事情などは[6]，よくその間の消息を物語るものである。

綜合目録が，その思想としては，すでにその起源を15世紀の初期に求めることができるとされていることについては上述した通りであり，その後部分的な企画と，或る程度の成功が見られたが，具体的な大きな成果を持ち初めるに至つたのは，矢張り19世紀の終りであつた。こうした意味で，この時を真の綜合目録開始の時期としている。ヨーロッパ諸国においては，イタリー（1883），スウエーデン（1886），ベルギー（1895），ドイツ（1895）などが19世紀に，デンマーク（1901），スイス（1914），オランダ及びイギリス（1922），フランス（1927）などが20世紀に，ある種の綜合目録を開始したと言われているが[7]，アメリカにあつては，議院図書館において，全米綜合目録の企画が具体的な発足を見たのが，1901年であつた。然しながらこれら開始の時期については，勿論異論なしとしない。すなわちイタリーにおいても，すでに1859年という早い時代に，ミラノ（Milano）にあつては，この都

市に所在する公共機関がもつ逐次刊行物の綜合目録を作製して，この種のものでは世界最初とされており[8]，アメリカでも同一の綜合目録が，1876年メリーランド州ボルチモア(Baltimore) 市内の8機関のものに対して作製されて，この国における最初のものとされているが如きはその一例であり[9]，これらは言うまでもなく狭義の綜合目録である。これに対し，一般綜合目録の分野においては，先ず一つの地域的な拡がりをもつて，又最も相互に関連の深い行政的な単位と結び付いて，その単位の範囲内から，次いでより大きな単位間の相互の関係に及び，国家的な企画から，国際的なものへの発展に連る経路を辿ることができる。地域（region）の語は，より小範囲の地区（Local）の意味をも含めて，綜合目録の上にも，その規模の上にも大きな相違が見られるが，正に現代はそれぞれの国家を一つの地域的単位として，その基盤の上に，それら諸国家間の調整を必要としている時代ということが出来る。この面に深い関心を有つユネスコでは，書誌サービス改善国際会議（International Conference on the Improvement of Bibliographical Services）などを通じて，書誌情報の国際交流の問題について，その在り方が検討されて来ているが，結局は，こうしたものの基礎は，夫々の国において堅固に確立された書誌活動の上に置かれるべきものであるという改善会議の結論に留つている。すなわちその国際交流に参加を希望する国々が，国際的組織の中で，すぐれた書誌サービスを有ち得ることができない場合に在つては，ユネスコ自体が，別個に特別のすばらしい国際的な計画を打ち出して行くことは，到底困難であるとして，各加盟国に対する，特に最新の全国書誌の発達とその促進の助成に力を尽している[10]。この様にして綜合目録に対する国際的な調整に関する具体的な課題は，各国における全国綜合目録の発達を期待する段階をなお多く出でないものということができよう。

全国綜合目録は，理論的には地域綜合目録の次の発展段階として考えられるであろうが，現に各国において見られる実情は色々な形態をとつている。1900年スイスのチューリッヒ市（Zurich）所在の図書館が，一本の綜合目録を編成するための協力体制を作つたことをもつて，近代における最初の地域綜合目録であるとされているが，1935年には市内20以上の図書館が参加している。一方こうした情勢に呼応して，この国の首都ベルンにおいて，1928年以降，118の図書館を含む全国綜合目録編さんの事業が開始され，他面においては，ジュネーブ（Geneve），ナーシャテル（Neuchatel）の二市が，チューリッヒに次いで同様市内図書館を対象とする綜合目録を開始した如きは，都市を単位とした綜合目録に発し，しかもこうしたものの広範な発展と普及とを俟たずして，一方において全国的な企画を開始するに至つた好例であり，これに対してイギリスが現在到達している実情は，むしろ地域合同目録の円滑な遂行を基盤とし，その結果として必然的にもたらされたものということができる。すなわちこの国においては，地区図書館組織（regional library system）と，ロンドンの

国立中央図書館（NCL；National Central Library）とを結合した組織の下に成立しているが，この地区図書館組織は，北部，北西部，ヨークシヤー，西方中部，東方中部，南西部，南方東部，ロンドン，ウエールズなどの各地区に分れ所謂集葉形式（sheaf form）をもつて，夫々の地区の綜合目録を数部作製し，1部は地区中心館に備付け，1部をロンドンのNCLに送付する仕組になつている。この様にしてNCLは全英綜合目録の本部として，その目録を通じ，又約800に及ぶ館外協力館（Cooperative outlier library）を背景にして，この図書館が実際に動員し得る図書の数は2100万冊にも及ぶ大きな機能を持つに至つているのである。このNCLが英国王の允許を得て国立とされたのは1930年のことであつて，その前身は1912年に設立された学生中央図書館（Central Library for Student）であつた。すなわち図書の入手困難な事情に在る学生個人を主な対象として，図書貸付及びそのあつせん業務を目的とするものであつた。

イギリスの全国綜合目録編成に至るこの様な経緯に対して，最も対蹠的な事情をもつものはイタリーである。イタリーにおけるこの企画は，僅か数年前の1951年2月のことであり，その実施に必要な細部の具体案は，フェラビノ教授（Aldo Ferrabino）を長とする委員会に依つて検討されているが[13]，その構想はローマのヴイットリオ・エマヌエレ国立図書館（Bibliotheca Nazionale Vittorio Emanuele）を中心図書館とし，ローマ，フィレンツェ，ミラノ，ナポリに在る国立図書館を支部センターとして，先ず主要図書館の目録カードの複製を行い，今後5年乃至6年後に，全国主要図書館所蔵のものに対する綜合目録の編成を終ろうとしているものである。すなわちイギリスとは逆に，中央における国家的な企画を，中心館の支部センターを通じて一挙に樹立し，これを地区的なものに及ぼして行こうとする好例である。

またドイツにおいて行われたこの事業は，スイスの夫れに似て，なおその性格を異にしている。すなわちその当初においては勿論全ドイツにあける主要図書館が所蔵する図書を包含する計画をもつて為されたものであつたが，1895年その範囲をプロシヤの国立図書館，10綜合大学，4工業大学の図書館，Braunsberg学士院，ババリア州立ならびに国立ウィーン図書館に限定し，プロシヤ綜合目録（Gesamtkatalog der Preussischen Bibliotheken）として発足した。第1次世界大戦のため，この目録を印刷する計画が中絶し，1931年に漸くその第1巻が刊行されたが，この綜合目録に所載されたものは，1930年1月以前の刊行に係る図書であつた。1936年第9巻の刊行と共に，ドイツ綜合目録（Deutsche Gesamtkatalog）と改称され，ここにおいてドイツ全土約100館の蔵書が収録されるに至つた。この様にドイツは，その初期において他の国に率先したこの面の輝やかしい業績を留めているが，当時におけるドイツ最強のプロシヤ王国をその基盤とし，その上に全国的な範囲に拡大し，而もそ

の対象を主として学術図書館に向けている点において，その特長的な性格が見られるのである。我が国においては，1948年（昭和23年）国立国会図書館法をもつて規定された「日本の図書館資料資源に関する綜合目録」（第21条第4項）の作成という法的義務があり，これに基づいて，現に編成されつつある全国綜合目録は，イタリーの企画に似て，而も支部センターの組織を有たない点で相違しており，更らに地域綜合目録の基盤にも拠つていない点でも，ドイツ，イギリスの場合とは異なるのである。

現在アメリカにおいて見られるこの事業は，世界における最も輝やかしい成果を収めているものであるが，議院図書館において行われている全国綜合目録，ならびにこの目録と地域綜合目録との関係などは，又他の国の場合とは異なる事情を有している。元来議院図書館において，この様な企画が行われるようになつたのは，上述の如く1901年のことであつて，1898年に開始されたこの図書館に対する印刷カードを基礎として発足している。すなわちこの印刷カードを単に議院図書館用のみのものとしないで，最も身近かな関係に在るワシントン所在の各図書館，次いでボストン公共図書館，イリノイ大学図書館などの著者カードを之に加える方法をもつてしたものである。今日に至る57年，単に合衆国のみならず，カナダの図書館もその中に包摂されており，1942年におけるそのカード枚数は1075万，4年後の1946年においては1400万を数え，その間における年間の増加は平均81万余を示している[14]。

アメリカの特長は，こうした議院図書館における全米綜合目録の異常な発展と，他面これに併行した地域綜合目録の健全な発達であろう。Berthold が掲げている地域綜合目録（Regional and local union catalogs）18種[15]（地域主題綜合目録は25種）の中，その創始の年代順に排列したものによると[16]，カリフォルニヤ（1909），オレゴン（1932），ニユー・ジヤーシー（1934），ナッソー郡（1934，ニユー・ヨーク州），北カロライナ（1934），ロード・アイランド（1935），ナシヴィル（1936，テンネッシー州）フィラデルフィア（1936，ペンシルバニア州），クリーブランド（1936，オハイオ州），デンバー（1936，コロラド州），ニユー・ヨーク（1936），オハイオ（1937），ニブラスカ（1938），ヴエルモント及ウエスチェスター郡（1929，ニユー・ヨーク州），アトランタ＝アゼンズ（1940，ジョージヤ州）となつており，1936年創始のものがその3分の1を占めている。而して議院図書館の全米綜合目録と地域綜合目録との直接の関係は，特にその寄托目録（Library of Congress depository catalogs）を通じてある。この寄托目録はすなわち，同館が発行する印刷カード目録を，発行の都度全米59館に送付して之を寄托し，各館は整理の上一般の利用に供するものであるが，その内訳は，地域綜合目録（regional union catalog）拡大綜合目録（expanded Library of Congress depository catalog）30，不拡大綜合目録（unexpanded...）25の3種である。この中不拡大綜合目録は，送付されて来たそのままを整理排列して

備付けるものであるのに対して，拡大綜合目録は，地域的単位の観念に拘束されることなく至つて広範な分野，すなわちヨーロッパの図書館の目録カードなどをもこれに附け加えて，これを更らに拡大したものであつて，バークレーのカリフォルニア大学の寄托目録には，米国内の7つの大学その他を始め，イタリーのバチカン図書館のものが含まれ，スタンフォード大学では大英博物館のものを，ノースウェスタン大学ではプロシヤ州立図書館及びブラッセルの国際書誌学会のものを付け加えて編成している。この様に拡大綜合目録の中に加えられるものは，夫々の図書館がもつ特殊事情に基づいて選定されることは言うまでもないが，自然すぐれた蔵書を豊富に有つ図書館がその対象とされ，従つてアメリカ国内のものとしては，フォルジヤー沙翁図書館，ハーバード大学，ジョン・クリラー大学，ニュー・ベリー大学，プリンストン大学，シカゴ大学，ミネソタ大学，ウェスリー大学の図書館などが，最も数多く議院図書館の寄托目録中に包括される結果となつている[17]。

またここでいう地域綜合目録は，寄托目録をその地域における綜合目録の根本的な支柱として，これにその地域内図書館の目録カードを併合しているものであつて，カリフォルニア州立図書館内にある州綜合目録の如きは，自館のものはもとより，州内6つの大学図書館，42の郡立図書館，13の市立図書館，その他13種に上る学会・協会など，州全域に亘る合計74の図書館が，寄托目録と一体に編成されているのである。アメリカにおける最も古い地域綜合目録として1909年に発足したこの目録は，その出発においては，新刊を除外した逐次刊行物に限定して行われたもので，次いで非小説類をその範囲に加えた。しかし今日の大きな発展を見た直接の原因は，1914年議院図書館の寄托目録を受領するようになつたことであるといわれている。

この様に議院図書館の全米綜合目録の発展と，地域綜合目録の発達は至つて緊密な関係を有しているが，今後における一つの課題として，この二つの綜合目録が夫々発展を遂げて行つた結果，当然起つて来る両者間の，最も効果的な共働の方向に関する問題がある。言うまでもなく両者の分化は，一方が包括的であつて，他が集約的であることを基礎としているものであつて，若し議院図書館の目録が，更らにすべての郡（county）を網羅して行く段階に到達したとすれば，地域合同目録の有つ意義は，至つて小さなものとなるであろうとする考え方である。一方地域主義（regionalism）の根拠とするところは，夫々の地域は，自らの力をもつて，各々の問題に対処し得るように，文献の調整が行われねばならないという点に置かれている。ここにアメリカの綜合目録がもつ特長的な一面が見られるのである。

1) Hoesen, Henry Bartlett van : Bibliography ; practical, enumerative, historical. 1928. p. 240.

2) Berthold Arthur B. : The bibliographical center. *In* Downs, Robert, B. *ed.* Union

catalogs in the United States. 1942. p. 313.

3) —— : Union catalog idea. *In* Randal, William M. *ed.* The acquisition and cataloging of books. 1949. p. 251.

4) —— : Directory of union catalogs in the United States. *In* Downs, Rober, B., *ed.* Union catalogs in the United States. p. 355-56.

5) *ibid.*, p. 367.

6) *ibid.*, p. 363.

7) Berthold Arthur B. : Union catalog idea. *In.* Randal, Wibliam M. *ed.* The acquisition...p. 24.

8) Downs, Robert B. : Union catalogs in the United States. 1942. p. 6.

9) *ibid.*, p. 7.

10) Evans, Luther H. : Unesco work and method illustrated by the library programs. *In* Carnovsky, Leon, *ed.* International aspect of librarianship. 1955. p. 12-13.

11) Merritt, LeRoy Charles : The administrative, fiscal, and quantitative aspects of regional union catalog. *In* Downs, Robers B., *ed.* Union catalogs in the United States. 1942. p. 5.

12) Harrod, L.M. : The libraries of Great London. 1951. p. 138-39 ; Vollance, Robert F. : Library co-operation in Great Britain. 1952.

13) Scarafoni, Camillo Scaccia : The union catalogue of Italian libraries. *Unesco Bulletin for Libraries*, vol. 9, No. 10, Oct. 1955, item 578.

14) Berthold Arthur B. : Directory of union catalogs in the United States. *In* Downs, Robert B. *ed.* Uuion catalogs... p. 351-391.

15) *ibid.*, p. 351.

16) —— : Union catalog idea. *In* Randal, William M. *ed.* The acquisition and cataloging of books. 1949. p. 244.

17) *ibid.*, p. 243.

5

大英博物館の第二の創建者，あるいは当時の人々によつて図書館人中のナポレオン（Napoléon unter den Bibliothekaren）とまでいわれた上述の Antonio Panizzi は，当時すでに図書館の蔵書が，略々20年毎に倍加するという予測を樹てたと伝えられているが[1]，規模の大きなアメリカの研究図書館は，1876年以降，この予測を現実として体験する結果になつた。特に20世紀に入つてからの大学図書館の蔵書は，これ以上の高率をもつて急激な増大を見るに至つており，この現象をもつて近代大学図書館発展の最も顕著な一面としている[3]。図書館における蔵書の増大と，これに起因する諸問題は，歴史的にも早くから見られ，図書館人としても不滅の業績を留めている哲学者 Leibnitz（1646-1716）も，若し世界がこの勢

いで1000年を経過し，又今日のように多数の書物が書かれて行くならば，あらゆる都市は図書館で構成されることになるであろうと語つたと云われる[4]。丁度印刷術が発明されて2世紀後における実情に対してなされた，図書館人としての Leibnitzの感慨である。Leibnitz におけるこの Phantasie に対しては，現実として，アメリカのケンブリッヂの図書館が，次第にボストン市に向つて延び，ボストンの図書館はケンブリッヂに向つて拡がり，その結果両都市間に介在する空間を，すべて図書の海中に没して終うであろうとまで懸念された事態をもつて答えられている。

M. B. Iwinski という人は，印刷術の発明から1908年に至る約450年間に生産された書物を，2500万種以上と推算した[5]。勿論こうした数字の算出に当つては避け難い多くの困難が付随する。すなわちいずれの国においても，夫々の時代に対する統計的数字が殆んど欠けている事以上に，一体図書という概念の中にどの範囲のものが包含されて来ているかという点について，国に依り又時代に依つて喰い違いが存するからである。一方現にシカゴ大学図書館学部 Jesse H. Shera 教授は，特に20世紀に入つて以後の夥しい文献の増加と，これに対処すべき図書館学的な技術部門の問題に関連して，ヨーロッパにおける印刷術の発明以降の図書の種類を，単行本については1500万から2000万，逐次刊行物中に所載の諸論文を加えると数億，更らに小冊子類すなわち短命物に及ぶと，恐らくは天文学的な数字を示す結果になるであろうと語つている[6]。又 Scutter という人によつて，1876年以前の約250年間に見出された学術雑誌が4,390点，これに対して，1934年オックスフォード大学から出版されている "A world list of scientific periodicals published in the years 1900-1933" に所載されているものだけでも24,029点，すなわち僅か33年間にその約6倍の数字を示していることが指摘されている[7]。

Shera 教授が上述の様な数字を示しているのは，結局何人と雖，今日現在するところの書誌単位（bibliographic units）については，その数を，どの程度の確実性においても到底把握することが不可能であること，従つて又ゲスナーの夢（Gesner's dream）も，いよいよ今世紀に入つてからは，10年毎に，その影を薄くして行かざるを得ない事情に立至つたとする彼の見解を述べんとしたものである。ゲスナーの夢というのは，彼自身の言葉をもつてすれば，"a universal world bibliography" を成し遂げようとした Conrad Gesner の構想を指すものであり，同時にこのことは綜合目録及び綜合書誌が，共にその最後の目標として描く universality の否定を意味するものである。

この様な書誌単位の激増と共に，今世紀が招来している他の新しい問題として，従来における graphic record の概念に加えた大きな変化がある。現代においてこの概念を新しく如何に規定するかは，図書館学上の緊急課題となつており，1950年7月24日から29日に及ぶ

5日間，シカゴ大学図書館学部大学院が，その第15回年次集会（Fifteenth Annual Conference of the Graduate Library School, University of Chicago）を開催するに当つて採り上げたテーマの一つは，すなわちこの問題に外ならなかつた。しかも多くの権威者を集めたこの会合にあつても，終にこれを定義付けようとする努力は成功を見るに至らなかつたと記されている。すなわち単に書かれたり印刷された形で，人間の言葉を表わしているものに対して，言葉自体を再製することのできる別の記録，音楽的な音響を表象している黒点に対して，音響それ自体を録音したもの，写真帳に対する個々の写真，次いで映画フィルム，更らには総じて触覚記録と呼ばれるべきもの，その他嗅覚に訴える形で後世に遺され，他に伝えられ得るものなどは如何に取扱うべきであるかという課題がここでは論争の中心となつた。この様に20世紀は graphic record の多量化と多様性，更らにはその内容と形態におるけ複雑性などが，いわゆる bibliographic organization，すなわちグラフィツク・レコードの科学的・組織的な登載，その能率的な管理体制を著しく困難にして来ているのである。John Mackengie Cory が，現代をもつて "bibliographic chaos" の時代であるとしているのは[8]，正にこの意味である。普遍綜合の理念をその根底に有つ綜合目録の限界がここに新しく強く追求され，この目録の現代及び将来に亘る正しい在り方が真剣に論ぜられる所以もまたここに存すると言えよう。

Berthold によると，現にアメリカには37種類の夫々タイプを異にする綜合目録が存在している。その中2種は全米的な範囲をもつものであり，15種は地域的であるが，残りの20種は主題によつたものである[9]。この主題綜合目録（subject union catalog）には，例えば地方史に関するカード枚数僅か2～3000程度のものから，医学綜合目録の如く12万枚にも及ぶものなど，その規模は区々であるが，然しこの目録だけでも，20種を合すると，ここに100万という大きな数が生れて来るのである。こうしたアメリカにおける主題綜合目録の殆んど全部は，むしろ狭い地理的範囲において行わることをその特性としているが，こうした目録と，地域綜合目録との調整は，恰も地域綜合目録が，全体計画（national plan）に対して，特別の顧慮を加えることなしに編成されて来た発展の姿と共に，現代において強く顧みられている。すなわち主題別綜合目録の価値を疑うものではないとしても，たしかにここに見落されている一つの問題があることを指摘し得るのである。例えば医学図書を一本の綜合目録にし著者のアルファベット順に排列したものが，果してどの程度医学関係者の主題に基づくカードえのアプローチに堪え得るか，むしろ主題目録としての機能は，もつと細分された主題，或いは特殊の件名や観点のもとに分類されたものの中にこそ求めらるべきであり，こうした一歩進んだ段階が為されない限り，正しくは選択綜合目録（selective union catalog）と称すべきであるとするところに一般綜合目録との調整を可能にする条件が生れて来るので

ある。しかもアメリカにおける主題綜合目録の殆んどが，その地域的範囲においては，一つの都市を出でないものであるという事情は，ここに地域綜合目録との密接な関連について，現代は特に強くそれを求めているということができよう。

地域綜合目録については，その大部分が各々前述の全体計画あるいは統一計画（unified plan）ともいうべきものに，適応させて行く問題についての顧慮が全く払われて来なかつた事に対する反省が強く求められている。その結果招来している労力の重複，曖昧な地域区分，統合性の欠如などが挙げられるが，同時にこれらを調整する中央機関の存在が要望されるようになつた。勿論理論的には，その機関として議院図書館の全米綜合目録部や図書館協力部（Library of Congress Division of Library Cooperation），さらにアメリカ図書館協会図書資料部（A. L. A. Board on Resources）などの存在が考えられるであろうが，若しこれらの機関に依り適切な調整が行われて，相互に有機的な発展を遂げて来ていたとすれば，アメリカの綜合目録は，各地域の図書館資料を最大限に利用し得る頗る魅惑的で，極度にまたその貴重性を高め得たであろうとされるのである。

議院図書館の全米綜合目録も，アメリカ全土に亘るもの及び少数のカナダのものなど合計数百の図書館から送付されて来るカードに依つて編成されこの国における綜合目録の頂点とされてはいるが，イギリスの場合と異つて，地域綜合目録にその基盤を置いていない点において，多くの問題を残している。この綜合目録が，ハーバート大学以下29の大学図書館，ボストン以下4つの大きな公共図書館，農務省以下17のすぐれた参考図書館など，この国における主要図書館50個所を主軸とすることによつて，一応総括性を保つてはいるが，事実は自館以外の図書館のものに対しては，その蔵書の全体に及ぶものではなく，要するに議院図書館の綜合目録はあらゆる意味において，規模の大きな選択綜合目録であるといわれるのはこのためである。従つて全米綜合目録としての実は，地方綜合目録に対して求められたと同じ関係で，この国としての全体計画の中に，その頂点としての性格が要請されるのである。各国の全国綜合目録が，この様な性格をもつて編成されて行くとき，始めてここに国際的な共通の場が見出し得られるのである。bibliographical utopia とか，library millennium の思想，及びこうしたものの可能性を考える人々のなお存するのは，Gesner の構想とは異つて，国家全体としての有機的な体制，それを通じての国際的調整をその背景としているものである。（1957年3月）

1) Predeek, Albert : A history of libraries in Great Britain and North America, *tr*. by Laurence S. Thompson. 1947. p. 66.
2) Hessel Alfred : A history of libraries, *tr*. by Reuben Peiss. 1955. p. 116. (Reuben Peiss memorial ed.)
3) Wilson, Round L. & Tauber, M. F., *ed*. The university library. 1948. Preface.

4) Hessel Alfred : Geschichte der Bibliotheken. 1925. p. 113.

5) Hoesen, Henry Bartlett van : Bibliography ; practical, enumerative, historical. 1928. p. 2. 但し，Merritt は，この数字の出し方は正当性を欠き，正しくは 10,378,365 種とすべきであるとしている（The administrative, fiscal, and quantitative aspects of regional union catalog. *In*. Downs. Robert B. *ed*. Union Catalogs in the United States. p. 78）

6) Shera, Jesse H. : Classification as a basis of bibliographic organization. *In* Shera, Jesse H. & Egan, Margaret E., *ed*. Bibliographic organization. 1951. p. 39.

8) Shera, Jesse H. & Egan, Margaret E., *ed*. Bibliographic organization. p. 263.

9) Berthold Arthur B. : The union catalog idea. *In* Randal, Willian M. *ed*. The acquisition and cataloging of books. 1949. p. 244.

10) Downs, Robert B. : Union Catalogs in the United States. 1942. Introduction. xxi.